

言語理論と英語教育(15)

—メタファー思考を養成する—

田 中 彰 一

Linguistic Theory and English Teaching (15)

—Cultivating Metaphorical Thinking—

Shoichi TANAKA

Summary

This paper is concerned with the argument that metaphor should be given an important place in English learning. Firstly, a review of metaphor analysis originated by Lakoff and Johnson (1980) is given. Secondly, it is discussed that metaphorical thinking should be incorporated into the process of idiom learning. Thirdly, a range of examples of phrasal verbs are analyzed experimentally based on conceptual metaphor, leading to the conclusion that metaphorical thinking has an important role to play in English learning.

Key words : conceptual metaphor, metaphorical thinking, idioms, phrasal verbs

1. メタファー

作家の村上春樹氏が2009年2月15日「エルサレム賞」受賞の席で次のようなメタファーを用いて自らの立場についてスピーチをしたことは記憶に新しい。

(1) Between a high, solid wall and an egg that breaks against it, I will always stand on the side of the egg.

この「壁と卵」のメタファーには二重の意味があることを作家自身が説明している¹が、このようにメタファーは抽象的で説明困難な事象を生活言語のレベルに近づける役割を持っている。

さらに、たとえば政治や選挙の言語には「戦い

のメタファー表現が出てくることを日常的に見聞きしているのです。これが日本語にも英語にも共通する (Kondaiah (2004)) ことが容易に推測できる。また、英語で経済を語る表現には、人間の健康状態を表すメタファーがあてられることが多く (Lennon (1998:20)), 日本語でも「アメリカ (経済) がくしゃみをすれば…」や「中国市場は回復気味である」などのメタファー表現が使われるのをしばしば耳にする。

このようにメタファー表現は身近なものであり、伝統的な修辞上の技法としての位置づけを超えたはたらきをしているのではないかと考えることができる。このような考えの画期的な枠組みを

提案したのが、Lakoff and Johnson (1980) の研究である。Lakoff and Johnson は、メタファー²が言葉の周辺的な現象というものではなく、言語の基底にかかわる構造的な一貫性を与えてくれるものであるとして、普段に使われている表現が「概念メタファー」に基づく比喩的表現であるという見方を提案した。

その見方に従うと、たとえば、以下の表現³には共通の背景的な概念があるとされる。

- (2) a. She burned with indignation. (怒りに燃えた)
 b. He has a fiery temper. (火のような気性)
 c. Jack was a hot-tempered young man. (怒りっぽい若者)
 d. She often flares up over nothing. (何でもないことにかつとなる, 燃え上がる)
 e. I lost my cool. (冷静さを失った)

これらの表現に共通する概念メタファーは ANGER IS HEAT であり、怒りという心理状態を熱との類似性で捉えた比喩的な表現となっている。このような表現は、対訳からもわかるように、日本語にしても十分理解できるものであり、その点で日英語に共通して日常的に使われる表現といえることができる。

認知意味論では、このような概念メタファーが成立するには2つの概念領域間で類似性に基づく写像 (mapping) があるとされ、ANGER IS HEATでは起点領域 (source domain) である熱の有り様の型を目標領域 (target domain) である怒りの型へ写像していると分析される。図示すれば以下のような対応関係になる。

- (3) HEAT ANGER
 起点 - - - -> 目標

写像される発想の型・パターンをイメージスキーマと呼び、これは抽象的構造体として私たちの認識と深く関わっている。(テイラー・瀬戸 (2008), 谷口 (2003)) たとえば、(2)では熱の持っている温度の上下 (UP-DOWN) のスキーマが、人間の持っている感情 (ここでは怒り) の表出 (の上下) に写像されていると見ることができる。

本稿では、このような認知意味論の認識を「メタファー思考 (metaphorical thinking)」と呼び、Boers (2000), Low (1988), Littlemore and Low (2006) 等で提言されているメタファー認識の重要性を前提として、概念メタファーの分析をおこなって、方向や存在のメタファーの重要性を吟味する。それに基づいて、英語のイディオムの学習におけるメタファー思考の意義を考える。特に句動詞に関して、不変化詞の持つ方向の身体性が比喩的な意味を創り出していることを指摘し、英語学習上重要な役割を果たすことを論じる。

2. メタファー思考

メタファーやメトニミーを中心とする比喩能力が言葉に反映されていることは容易に推測することができる。たとえば、depressionは、OEDによれば、その語源はラテン語の depression-em で、その語義は「押し下げる」行為である。その意味の初例が、1656年であるのに対し、経済の「不景気、不況」の意味の初例は1793年、心理的「憂鬱」の意味の初例は1905年となっている。ここでは、物理的な「押し下げられている」状態を、不活発な経済状態に比喩的に当て、さらに意気消沈している人間の心理状態にも当てはめるようになったのではないかと推測できる。

このような推測ができることは、英語の語彙習得を進める指導において語源を調べる活動があることを裏付け、学習者の語義の記憶を助ける側面があると考えられる。各種の学習英語辞典⁴が、語義の前に語源を記載しているのはそれを期待してのことであると思われる。

また、このように英語の語義が拡張・展開していく際に、比喩的な過程があることは十分理解できることではあるが、語源の情報以外に実際の英語指導においてこのような認識がどのような利点をもちうるであろうか。メタファー思考をどのように養成していけばいいのであろうか。

ここでは概念メタファーの種類から考えてみたい。Lakoff and Johnson (1980) は概念メタファーを次のように大きく三つに分類している。

- (4) a. 構造のメタファー
 b. 方向性のメタファー
 c. 存在のメタファー

前節で見たANGER IS HEATの概念メタファーは、(4a)の構造のメタファーと言われる。つまり、このメタファーは熱と怒りの類似性に基づくものであるが、言わば熱の構造を怒りの構造に当てはめている。熱に関する動きや状態が怒りのそれと構造的に類似しているからということもできる。構造のメタファーの他の例としては、TIME IS MONEY, ARGUMENT IS WAR, LOVE IS A JOURNEYなどがある。例文⁵をあげる。

- (5) a. You're wasting my time. [TIME IS MONEY] (あなたは時間を浪費している。)
 b. He attacked every weak point in my argument. [ARGUMENT IS WAR] (彼はすべての弱点を攻撃してきた。)
 c. Our marriage is on the rock. [LOVE IS A JOURNEY] (私たちの結婚はいまや岩に乗り上げている。)

構造メタファーの成立過程も興味深いだが、ここで注目したいのは方向性のメタファーと存在のメタファーである。なぜならば、後で見ると、これらのメタファーは空間意識と関係しており、言語を創り出した人間がそもそも持っていた身体性の感覚を見いだすことができるからである。

たとえば、方向性のメタファーでは、上下の感覚が大きくはたらいっている。

- (6) a. I'm feeling up. [HAPPY IS UP] (気分は上々だ。)
 b. I'm feeling down. [SAD IS DOWN] (気分は下降気味だ。)
 c. My income rose last year. [MORE IS UP] (給料が昨年上がった。)

また、存在の概念メタファーは、存在を示される場所との関係が比喩的意味を派生する。

- (7) a. I have him in sight. [VISUAL FIELD IS CONTAINER] (彼が視界に入っている。)
 b. Are you in the race on Sunday? [RACE IS CONTAINER] (日曜のレースに出ます

か。)

- c. He is in love. [LOVE IS CONTAINER]
 (彼は恋愛中だ。)

以上の例の日本語の対訳表現からわかるように、日本語でも十分意味を理解できる英語表現(言語メタファー)であるのは、同じ概念メタファーを共有しているためであろう。概念メタファーの整理や考察は本稿の目的ではないが、ここでは方向性と存在のメタファーに注目し、第4節でおこなう句動詞の分析のため若干の考察をおこなう。

まず、(7)の存在の概念メタファーで使われている前置詞 in に注目すると、どの例でも前置詞により指定される場所 (landmark) があり、その場所の中に主体 (subject) が存在するというメタファーになっていることがわかる。(7a) では主体は him であり、指定場所は sight ということになる。同じように、(7b) では you と the race, (7c) では he と love が、それぞれ主体と指定場所として言語メタファーになっている。指定場所に存在することが指定場所と主体との関係をつくり出すと考えてよいであろう。

もう一度存在のメタファーで考えてみよう。

- (8) a. John is in the room. (その部屋の中にいる)
 b. John is in his forties. (40代である)
 c. John is in trouble. (困っている)

(8a) はメタファーではなく、存在を表す文字通りの表現である。(8b) はどうであろうか。40代とは年齢(時間)の概念であり in はそこを指定場所としてその中であることを表すことになり、結果的に主体である John が40歳代のどこかの場所にいることを意味することになる。(Lindstromberg (1997: 10)⁶ は、このように、時間と関係する前置詞の表現のほとんどは場所的な意味が根底にあると述べている。) (8c) は「トラブル」の中にいることを意味することになるので、比喩的意味としてトラブルになっている、「困っている」ことを意味することになる。

このように、基本的な前置詞の表す意味の比喩的拡張を見ると、存在の空間的な意味から拡張し

て、比喩的な意味を帯びていくという過程があると考えてよいであろう。方向と存在の概念メタファーは、ことばの身体性と関係し、ほぼ間違いなく言語表現が空間意識上のメタファー的な比喩に基づき形成されてきたことを裏付けるものであると考えられる。

おそらく、表現の意味の比喩的拡張は、まさにこの空間意識上認知しやすい方向や位置関係、たとえば内と外、接触や隔離、上と下などの関係が、視覚的にも感覚的にも理解しやすいために引き起こされるということであろう。このことは英語学習上も有利にはたらくはずである。言語的メタファーの表面的な違いの背景にある共通の概念メタファーを認識することにより、メタファー表現の理解と記憶を項目学習的に進めるだけでなく、システムとして体系的な理解に結びつく学習を進めることが必要である。英語学習において、このような学習が求められる領域は、イディオム学習であろう。

3. イディオムの学習

これまでの考察から、慣用句などのイディオムに概念メタファーが関係することは容易に推測ができる。イディオムには様々なものがあるが、たとえば to spill the beans (秘密などを漏らす), to rain cats and dogs (どしゃ降りに降る), Long time, no see (久しぶり) などの慣用句、熟語、句動詞や言い回し、諺などを含めると、英語学習においては大きな領域を占めることになる。しかもこの学習は項目学習 (item learning)⁷ となり、形と意味の対応の学習が1対1であるため、負担が大きいとすることができる。たとえば to kick the bucket のような場合、イディオムとして to die を意味することの学習は項目学習にならざるをえない。

Kovecses and Szabo (1996: 337) は、英語のイディオム表現をつくり出す認知メカニズムには「概念メタファー」「概念的メトニミー」「慣習的知識 (conventional knowledge)」の三つがあると指摘している。本稿でこれらのそれぞれを詳細に検

証する余裕はないが、これまで見てきたメタファー思考の分析により、イディオムに概念メタファーがあることは明らかであると言える。

熟語や句動詞と呼ばれる look at, look for, take off のような場合は、動詞が前置詞や副詞と結びつき、一見予測不可能な意味を表すため、さらに英語学習上の負担があると言われている。実際、Littlemore and Low (2006: 284)⁸ は、英語学習者にとって前置詞や不変化詞はひどくやっかいなものであると認めている。このことは辞書開発でも十分認識されていると思われる。たとえば、手元にある電子辞書では、英語の辞典に関して「成句検索」の機能があり、単語検索のように句動詞の検索ができるようになっている。

実際、どのような学習上の負担があるのであるのか。たとえば、次の例文を見てみよう。

- (9) a. The moon came out. (月が出てきた)
 b. The whole truth came out. (真実が露見した)
 c. Tomato stains don't usually come out.

(9a, b) ように、come out は「出てくる」意味を持つので出現の感じがあるのに、(9c) では「トマトの染みは普通とれない」という消失の意味合いを持つため、英語学習者はまったく逆の意味を同じ句動詞が持つという印象を持ってしまう可能性がある。

また、このようにひとつの句動詞が複数の意味を表すことも学習の負担となるであろう。たとえば、手元の英和辞典で put down の成句の意味を調べると、以下のような項目があげられている。(実際は15項目あるところを10項目に省略する。)

- (10) a. 下に置く, 降ろす
 b. 金をためる
 c. 書き留める
 d. つけにする
 e. 鎮める
 f. 井戸を掘る
 g. 人を困らせる
 h. 殺す
 i. みなす

j. 赤ん坊を寝かせる

このような項目列記型の説明では、特に初中級の英語学習者はまごつくばかりであり、なぜこのような雑多な意味を put down が表現できるのかをどう理解することはできないのではないかとと思われる。

また、学習者側で考えると、句動詞を使って表現するよりも、同意味の一語で表す方が語義がはっきりするために好まれる傾向があると言えるようである。ひとつには、形と意味が1対1対応であるために記憶がはっきりしており、同意味の一語表現の方が自信をもって使えることがあり、また、句動詞を使って誤解される可能性を避けたという意識がはたらくからである。たとえば、「埋め合わせをする、償う」を make up for ではなく compensate, 「延期する」を put off ではなく postpone と言うような場合が考えられる。英語の学習辞典でもこの点は配慮しており、多くの辞典で関連的に交互に参照できるようになっている。実際上の例でも (10e)「鎮める」では、定義の参考に suppress, subdue が添えられている。

このように、句動詞ではなく一語を選択することは意思疎通上は問題がないものの、英語の印象が大きく変わることは否めないであろう。非母語話者の視点からは、記憶についてもその方が経済的であるということができ、二枝 (2006: 40) が指摘するように、句動詞であれば難解な語彙を覚えることなく既に習得している語彙の組み合わせで新しい意味をメタファーとして用いることができる。まさにこの点が句動詞の役割であると言えるのではないであろうか。メタファーとして、一つの句動詞で多くの意味を表すことができることも表現の効率性を増す。次節で見ると、句動詞は、方向を表す前置詞を手がかりに、コンテキストに基づいて確認され、使用されているとみることができる。この点で、句動詞のメタファー思考を理解しておくことは、英語学習上重要であると言える。

4. 句動詞

文法上句動詞は大きく二つに分けられる。一つは動詞が前置詞と結合していると分析される場合で、必ず前置詞の目的語をとることになる。もう一つは、前置詞が動詞を修飾する副詞として機能し、強勢も副詞におかれ一つの意味を表す場合である。たとえば、look at の at は前置詞であるが、take off の off は副詞となる。この違いは結合度の違いでもあり、たとえば、前者では目的語を移動できないのに対して、後者では移動できる。目的語が代名詞の場合にも、次のように違いがある。

- (11) a. He looked at the moon.
 b. *He looked the moon at.
 c. *He looked it at.
- (12) a. He took off a coat.
 b. He took a coat off.
 c. He took it off/*took off it.

この二種類を厳密に区別する研究態度もあるが、ここではこれらを区別せずに句動詞とし、前置詞と副詞という品詞の違いも以降の議論で大きな問題とはならないので、両者を不変化詞 (particle) と呼んでいくことにする。(この品詞名は当然、これらの語が変化しないことに由来する。)

この節では句動詞で使われる前置詞に注目し、空間意識に基づくメタファー思考を使ってどのような推論により、句動詞の意味を確認することができるかを考察する。当然ながら、すべての句動詞を網羅的に扱うことは到底できないため、up, down, in, out, on, off の6つに注目して観察を進めることにする。ひとつには、これらの語が、動詞と結びついて句動詞となる使用頻度の高い不変化詞であるからである。(Biber 他 (1999: 413)) さらに、Lee (2002: 18) によれば、これらの前置詞は言語習得上もっとも基本的な認知と関係する概念を表しているからである。これらの語の表す空間的概念が、私たちの心の中に現実世界のモデルを作り上げるための積み木になると考えられている。

句動詞の例文については、Thompson and Martinet (1986: 295-339) があげているリストか

ら借用することにしたい。その理由は、学習上特殊な句動詞まで扱うことを避けたいからである。つまり、この文法書のリストを利用することは、ある程度使用頻度の高い一般的な句動詞の使用例を期待できるからであり、母語話者ではなく第二言語としての英語の話者にとって有益な例であると予測できるからである。また、前置詞の語義の分析は Lindstromberg (1997) に基づいておこなう⁹ ことにする。

以下では6つの不変化詞を個別にみるのではなく、例をなるべく対照的にとらえるために、inとout, onとoff, upとdownの3組を対比的に見ていく。

4.1. InとOut

前置詞inの原義は、指定場所 (landmark) である領域や容器内に入ること、入っていることであり、outは逆に指定場所から外に出ること、出ていることを意味する¹⁰と考えられる。(Lindstromberg (1997: 33-39)) この原義が当てはまるのは、be in (在宅、在室している)とbe out (外出している)である。さらに、come in (入る)とcome out (出る)、またmove in (引っ越してくる)とmove out (引っ越していく)では、移動が加味された概念を表すことになる。

次のbreak inとbreak outの対比を見てみよう。

(13) a. Thieves broke in and stole the silver. (窃盗犯は押し入って銀を盗んだ)

b. They locked him up in a room but he broke out. (閉じ込められたが脱出した)

ここではbreakの「力を使って壊す」意味に「内へ」が付加されて、「押し入る、侵入する」(a)になり、「外へ」が付加されて、「脱出する、脱走する」(b)の意味になっている。ここでの指定場所は建物であるが、指定場所が会話であれば次の例のように、「話に割り込む」意味となる。

(14) I was telling them about my travels when he broke in with a story of his own. (彼は自分の話で割り込んできた)

また、「外へ」の指定場所が示されなければ、

break outは自動詞となり、「始まる、勃発する」意味となる。

(15) War broke out on 4 August. (戦争が8月4日に勃発した)

同様に、cut inでは車が「割り込む」、cut outでは(外に出す)から「省略する、排除する」の意味となる。

(16) a. Accidents are often caused by drivers cutting in. (事故はしばしば車の割り込みで起こされる)

b. If you want to get thin you must cut out sugar. (やせたければ砂糖をやめなければならない)

どちらの例でも動詞cutは(切る)意味が比喩的になり、移動を表すだけにとどまることになっている。

句動詞take inでは「内へとる」で「理解する、受入れる」、take outでは逆に「外へとる」で「取り出す、消す」という意味が比喩的に派生する。

(17) a. I didn't take in what she was saying. (彼女が言っていることを受入れなかった)

b. The dentist took out two of her teeth. (歯を取り出した) Petrol will take out that stain. (ガソリンでその染みを消せるだろう)

これまで見た例では、方向のin「内へ」とout「外へ」が比喩的な意味拡張を導いていると考えられる。これに対し、put outではoutがさらに「そこにはない」「存在しない」ことへのメタファー的な意味拡張により、「消す」という意味になる。(Lindstromberg (1997: 40))

(18) Put out that light. (その明かりを消しなさい)
この場合、明かりを「つける」意味はput inではなく、put onとなる。

(19) a. He put in a claim for compensation. (弁償してもらえるように要求した)

b. Put on the light. (明かりをつけなさい)
同様に、die outは結果としての「消失」を意味する。

(20) Elephants would die out if men could shoot as

many as they wished. (象は絶滅するだろう)
同じく, back outはおこなっていた援助をやめる, 続けないことを意味する。

(21) He agreed to help but backed out when he found how difficult it was. (難しさがわかって援助をやめた)

このように, inとoutの不変化詞がかかわる句動詞では, 「内へ」「外へ」の方向の概念メタファーに基づいて意味が作り出されるが, さらに拡張される場合があることを見た。

4.2. OnとOff

前置詞onの原義は「表面への接触」であり, offはその逆で「表面から離れている」ことを意味する。(Lindstromberg (1997: 52-67)) この分析に基づいて考えると, スイッチなどのオン, オフは響きとして日本語に入っているようであるが, turn「回す, ひねる」から明かりやガスが接触の状態になるturn on「つける, 出す」となり, 逆に明かりやガスが離れていくとturn off「消す, 止める」の比喩的意味になると考えられる。(19b) で見たput on (明かりをつける)もturn onと同様であろうが, 指定場所が体になると「着る」を意味することになる。

(22) He put on a black coat. (黒いコートを着た)
その逆の「脱ぐ」はtake offであり, offの離れていく指定場所が体であるために「脱ぐ」の意味になると考えられる。

(23) He took off his coat. (コートを脱いだ)
またoffの指定場所が地面であると「離陸する」の意味となる。

(24) People can watch the planes taking off and landing. (飛行機が離陸したり着陸するのを見る)

同様に, 句動詞set offでは, 起点から離れるの意味で「出発する」の意味になる。

(25) They set off at six and hoped to arrive before dark. (7時に出発した)

Hold onとhold offでは, 接触を保ったまま続けるの意味で「待つ」hold onと, 離れている距離を

保つhold offの対比となる。

(26) a. If you hold on for a moment I'll get him for you. (もう少し待っていただけるなら)
b. The rain fortunately held off till after the school sports day. (幸いにも雨は降らずにすんだ)

同様に, keep onで「続ける」, keep offで「離れている」の意味拡張となる。

(27) a. I wanted to explain but he kept on talking. (彼は話し続けた)
b. "Keep off the grass." (芝生に入らないこと)

句動詞put offでは離れているために「手が届かないところ」へという意味合いで拡張し, 「延期する」を意味することになる。

(28) I'll put off my visit to Scotland. (スコットランド訪問を延期する)

さらにこの延長線上でoffは「望ましくない状態に, 悪く」なることを意味する場合がある。

(29) a. Orders have been falling off lately. (最近注文が減ってきた)
b. Ann has broken off her engagement to Tom. (婚約を解消した)

句動詞get onでは接触が良いことになるという方向で「進む, 成功する」を意味し, get offでは離れていられるという比喩で「逃れる」の意味になる。

(30) a. He is getting on very well with his English. (英語でとてもよくやっている)
b. He was tried for theft but got off because there wasn't sufficient evidence against him. (窃盗の罪で起訴されたが逃れた)

このように, onとoffの不変化詞の句動詞では, 接触と隔離によりメタファー的意味拡張がおこっている。ここで見た例から, おそらく接触と隔離の空間意識から, 近接のものはよいことになり, 離れたものは望ましくない概念メタファーがあると思われる。

4.3. Up と Down

不変化詞 up と down は当然上下の空間意識から出てくるメタファーが形成されるが、前節の on と off の場合のように、価値判断も関係することになるであろう。Up の原義は「上へ」であり、逆に down のそれは「下へ」となる。(Lindstromberg (1997: 183-194)) 移動を表す場合を見ると、この意味は明らかであり、空間移動の「上昇する」意味が句動詞の go up や come up にはある。

(31) a. The price of strawberries went up. (価格が上昇した)

b. A diver with an aqualung doesn't have to keep coming up for air. (呼吸のためにあがってくる)

さらに、「上へ」体が向かうことで get up 「起きる」その状態が be up 「起きている」となる。

(32) a. I get up at seven o'clock every morning.

b. Don't expect her to answer the doorbell at eight o'clock on Sunday morning. She won't be up.

また「上へ」置くことで put up 「立てる」、また「上へ」つまむことで pick up 「取り上げる」となる。

(33) a. He put up a shed in the garden. (庭に小屋を建てた)

b. He picked up the child and carried him into the house. (こどもを抱え上げた)

空間の上下が量の多寡や力の大小と重なるため、turn up では「増す」、turn down では「減じる」となる。

(34) a. Turn up the gas. (ガスの圧力をあげろ)

b. I wish the people in the next flat would turn down the radio. (ラジオの音量を下げる)

同様に、go down では体重や強さが「少なくなる」ことを意味することになる。

(35) a. During her illness her weight went down from 50 kilos to 40. (体重が減った)

b. The wind went down and the sea

became quite calm. (風がやんだ)

さらに、cut down では「減らす」となる。

(36) We must cut down expenses or we'll be getting into debt. (費用を減らさなければならぬ)

「下へ」が「紙へ」となると put down, take down に共通して「書き留める」意味となる。

(37) a. Put down his phone number before you forget it. (彼の電話番号を書き留めなさい)

b. He read out the names and his secretary took them down. (秘書がそれらを書き留めた)

面白いのは、ある方向への動きが行き着くと完了を意味することになることである。(Lindstromberg (1997: 186-187)) 特に up に関して、break up 「終了する」、take up 「占める、占有する」、pull up 「車を止める」、cut up 「小さく切る」にはこの比喩的な拡張が関わっているようである。

(38) a. The meeting broke up in confusion. (混乱のうちに終了した)

b. He has a very small room and most of the space is taken up by a grand piano. (部屋はほとんどグランドピアノで占有されていた)

c. A lay-by is a space at the side of a main road, where drivers can pull up if they want a rest. (休みをとりたければそこに車を止めることができる)

d. They cut down the tree and cut it up for firewood. (薪にするために木を細かく切った)

この完了の意味合いと近い意味として、down には結果的に壊れたり悪い方向に変わるというメタファー的な拡張がある。句動詞 break down 「壊れる」、pull down 建物を「壊す」、run down 「悪口を言う、バッテリーが落ちてくる」が当てはまる。

(39) a. The car broke down when we were driving through the desert. (車が壊れた)

b. Everywhere elegant old buildings are

being pulled down. (至る所で優雅な古い建物が壊されている)

c. He is always running down his neighbors. (いつも隣人の悪口を言っている)

d. This torch is useless; the battery has run down. (バッテリー電池が弱くなった)

以上のように、upとdownについても、空間意識としての上下関係から、意味が比喩的に拡張されて、句動詞の意味が派生していることがわかる。

4.4. 句動詞の多義性

本節で見たことから、概念メタファーが句動詞の意味の展開にはたらいっていることは確かであるように思われる。そのことから、句動詞の意味にも一定の意味の原則的なものがあるということになる。したがって、英語学習上もそうしたメタファー思考を認識しておくことで、単に1対1の語彙記憶のような項目学習から、ある程度柔軟な発想で句動詞を捉えることができるのではないだろうか。もちろん、特殊な句動詞についてはコンテキストや英語文化による影響を考えなければならないが、この柔軟な認識があれば、(10)で見たような、句動詞に複数の意味があることに惑わされることもないと思われる。

最後に句動詞 come off を考えてみよう。4.2. 節で見たように、不変化詞 off は「離れる」方向への概念を表す。この意味により近い方への移動を表す come が結合して物事が「起こる」、さらに良い方向への移動として「成功する」、離れていく方向も行き着くと「終了する」という意味合いになるというメタファー的展開になるという説明ができよう。

- (40) a. When is the wedding coming off? (結婚式はいつあるのか)
 b. I'm afraid that scheme of yours won't come off. (あなたの計画ではうまくいかない)
 c. 'Lady Windermere's Fan' is coming off next week. (来週終了する)

ここでは、動詞 come の示す移動と不変化詞 off が示す「離れる」方向の結合により、メタファー的に意味が合成されていることがわかる。ここでそれぞれの意味は、come off という句動詞の幅のある合成的な意味の可能性のひとつにすぎない。この認識は英語の句動詞の学習において重要な視点となる。そしてこの視点を可能にしているのは、本稿で見てきたメタファー思考であることは、本節の観察から明らかであろう。

5. 結 論

以上、本稿ではメタファーが日常的な英語表現に普遍的にあるという Lakoff and Johnson (1980) から始まった認知意味論の分析を出発点とし、英語学習上もメタファー思考を認識しておくことが、イディオム、特に句動詞の学習において重要な役割を果たすことを見た。

句動詞の意味派生では、すでに見たように、空間意識上認知しやすい方向や位置関係、たとえば内と外、接触や隔離、上と下などの関係が、動詞と結びついて言語的メタファーを作り出す、その背景に共通の概念メタファーを認識することが可能であることがわかった。

したがって、結論として、メタファー表現の理解と記憶を項目学習的に進めるだけではなく、システムとして体系的な理解に結びつく学習を進めることが期待されるということができる。¹¹

註

- 1 該当の箇所は以下のようになっている。
 What is the meaning of this metaphor? In some cases, it is all too simple and clear. Bombers and tanks and rockets and white phosphorus shells are that high wall. The eggs are the unarmed civilians who are crushed and burned and shot by them. This is one meaning of the metaphor.
 But this is not all. It carries a deeper meaning. Think of it this way. Each of us is, more or less, an egg. Each of us is a unique, irreplaceable soul enclosed in a fragile shell. This is true of me, and it is true of each of you. And each of us, to a greater or lesser degree, is confronting a high, solid wall. The wall has a name: it is "The System." The

- System is supposed to protect us, but sometimes it takes on a life of its own, and then it begins to kill us and cause us to kill others—coldly, efficiently, systematically.
詳しくは英文の原稿を紹介している新聞やインターネット上の記事を参照。
- 2 比喩の分類と名称の定義は本稿の議論と大きく関係することはないが、便宜上伝統的な定義を採用し、メタファーを「類似性に基づく比喩」、メトニミーを「近接性に基づく比喩」とし、換喩（シネクドキ）はメトニミーの近接性が部分と全体の関係になっているものを指すと考えることができる。たとえば、The kettle is boiling.において、実際に沸いているのはやかんの中の湯（水）である。言うまでもなく、本稿では網羅的に比喩表現の技法や理論的な意味を考察するのではない。
- 3 例文はRundell (2002)『マクミラン英英辞典』のmetaphor boxに記載されたメタファー表現より借用している。この辞典の先駆的な試みにおけるメタファー表現の分析を田中(2005)でおこなった。
- 4 たとえば、『ジーニアス英和辞典』大修館書店を参照。
- 5 例はLakoff and Johnson (1980)から借用。
- 6 Lindstrombergは、at, in, onなどの前置詞を時間表現について用いる場合（たとえばon Fridayなど）、「時間の前置詞」として区別することに関連し、この指摘をしている。この指摘は少なくとも歴史的には事実であるとしている。
- 7 項目学習とシステム学習についてはCruttenden (1981)やRingbom (2007)を参照。第二言語習得研究ではあまり一般的ではないが、Ellis (1997)でも言及があり、glossaryのリストに入れられている。
- 8 原文は以下のようにになっている。
Prepositions and particles represent a traditional and recurring nightmare for all learners of English.
Littlemore and Lowは、具体例として、I'll be there inside an hour.やThe TV is on.での用法、turn on, feel off, off workなどの句をあげている。
- 9 一部の前置詞について、Lee (2002) 2章にも参考になる考察がある。
- 10 日本語に置き換えることは危険であるが、この対比は日本語のウチとソトを想起させる。
- 11 もちろん本稿のこの主張が英語学習のすべての領域に当てはまるというわけではないことは言うまでもない。領域ごとの特性に応じた学習を進める必要がある。
- Boers, F. 2000. "Metaphor Awareness and Vocabulary Retention," *Applied Linguistics* 21/4 : 553-571.
- Cruttenden, A. 1981. "Item-learning and system-learning," *Journal of Psycholinguistic Research*, 10, No. 1, 79-88.
- Deignan, A., D. Gabrys, and A. Solka. 1997. "Teaching English Metaphors Using Cross-linguistic Awareness-raising Activities," *ELT Journal* 51/4 : 352-360.
- Ellis, R. 1997. *Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Herrera, H. and M. White. 2000. "Cognitive Linguistics and the Language Learning Process: a case from economics," *Estudios Ingleses de la Universidad Complutense* 8 : 55-78.
- 今仲昌宏. 2007. 「概念メタファーによる英語イディオムの学習」『東京成徳大学人文学部研究紀要』14: 51-60.
- Kondaiah, K. 2004. "Metaphorical Systems and their Implications to Teaching English as a Foreign Language," *Asian EFL Journal* 6/1, Article 3.
- Kovecses, Z. and P. Szabo. 1996. "Idioms: A View from Cognitive Semantics," *Applied Linguistics* 17/3 : 326-354.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lazor, G. 2003. *Meanings and Metaphors: Activities to practise figurative languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, D. 2002. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lennon, P. 1998. "Approaches to the Teaching of Idiomatic Language," *International Review of Applied Linguistics* 36/1 : 11-30.
- Lindstromberg, S. 1997. *English Prepositions Explained*. Amsterdam/Philadelphia: John

参考文献

Biber, D., S. Johnsson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.

- Benjamins.
- Littlemore, J. and G. Low. 2006. "Metaphorical Competence, Second Language Learning, and Communicative Language Ability," *Applied Linguistics* 27/2 : 268-294.
- Low, G. 1988. "On Teaching Metaphor," *Applied Linguistics* 9/2 : 125-147.
- 二枝三津子. 2006. 「英語句動詞の認知言語学的分析」『京都教育大学紀要』109 : 31-43.
- Ringbom, H. 2007. *Cross-linguistic Similarity in Foreign Language Learning*. Clevedon : Multilingual Matters Ltd.
- Rundell, M. (ed.) 2002. *Macmillan English Dictionary: For Advanced Learners of American English*. Cambridge University Press.
- 田中彰一. 2005. 「言語理論と英語教育(11)―メタファーの効用―」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』10/1 : 45-56.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』東京 : 研究社.
- テイラー, ジョン. 瀬戸賢一. 2008. 『認知文法のエッセンス』東京 : 大修館書店.
- Thompson, A. J. and A. V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar*. Oxford : Oxford University Press.